

【コメント】

真鍋俊照 MANABE Shunshō

フィスター先生、どうもありがとうございます。今さらフィスター先生のいろいろなお仕事を通じての業績について、私がコメントするのは大変はばかるわけですが、先生はもう長く日本にいらして、カンサスで美術の勉強をされて、Ph.D.も取られました。日本に来られて、私が初めてお会いしてから、もうかなり長くなります。すべては今お話に出てきましたコロンビア大学のバーバラ・ルーシュ先生を通じてであります。ルーシュ先生のさまざまな研究姿勢におそらく共鳴されて、フィスター先生の今日の研究の姿勢があるように思います。

お話にございました「尼門跡」、京都にはこの尼門跡の文化遺産の美術品(絵画)を研究対象にして研究することは、これまで日本人の研究者の間では、全くとは言い切れませんが、ほとんどなかったのです。つまり未開拓の分野だったのです。それをバーバラ・ルーシュ先生が、さまざまな遺品を通じてそれを救おうとされました。「救おう」というのはどういう意味かと言いますと、例えば京都には「尼門跡」という「宝鏡寺」「大聖寺」「曇華院門跡」などいろいろございまして、現在13ほどの大寺がございまして。これは大阪や奈良にも及んでいまして、したがって奈良の「円照寺」なども含めての話です。最近では「中宮寺」ももちろん研究対象にしているわけです。そして遺品を修理しましょう、というのがルーシュ先生の「救おう」というスローガンに合致する全体的な仕事の一つだと思います。その有力なメンバーとしてフィスター先生がいらっしゃるわけで、午後からご発表になるモニカ・ベアテ先生や京博の山川先生も含めて、ルーシュ先生の仕事の有力メンバーです。

お話の中には「後水尾天皇」(A.D. 1596-1680)という、京都の尼門跡の多くのバックボーンとなる重要な天皇がいるわけです。大体、尼門跡に入った方々、ご住職になられた方々の尼さんというのは、後水尾天皇のお子さんであるとか、親類関係にある方が非常に多いのです。そういう関係で、後水尾天皇の精神というものがこの尼門跡を通じていろいろなかたちで表れている。そういうところにフィスター先生は着目されて、とくに円照寺の信仰とその美術作品を通じていろいろな精神構造であるとか、信心の具体的な

となどにふれているのです。

私がとくに関心があるのは、今お話に出ました後水尾天皇と尼門跡という場所を通じて、信仰の姿勢がそれぞれ入れられた尼門跡の遺品の中に、また礼拝対象に鮮明に具現されているという点です。円照寺の創建者である「文智尼」すなわち「文智女王」は後水尾天皇の第一皇女です。この「文智尼」ともう一人、林丘寺の開山「元瑤」さんたちの作品を見てみますと、元瑤さんが遺愛した観音像が3,000軀あったとも言われております。フィスター先生はそれを一つ一つ追いかけて調査されているのです。われわれが普通美術史で対象とする単なる木像や画像だとか、そういうものではなくて、しきみの葉を抹香にして、それを固めて塑像のようなかたちにして型にはめる。そういう観音さんのたくさんの姿が具現する。こういういきさつは、信仰と具現されたお像というものの関連をフィールドワークをとおして実際に追跡してみないと、その価値観というのは分からないと思うのです。ここにフィスター先生が着目されたことは、私は非常に素晴らしい着眼点だと思います。

「お香」というものと、その「におい」というものが、研究の対象である観音さんそのものであるという。結局、仏像というのは礼拝対象として隔たりのあるもののように見えますけれども、尼門跡の方々の信仰の証というのはそういうように一体感を煮詰めていくところに特徴があるのではないかと思います。

このような礼拝対象として堂内に仏像がまつられているわけですが、尼門跡寺院では残念ながら中から取り出すことはできなかった。しかしそれは当然のことなのです。日本では、そういうお堂の中の囲いの中というのは「内陣」といって結界されているわけで、非常に神聖な場所である。そこまでは踏み込まない。しかし外側から見ていると、信仰の本質的なものがすごくよく見えるというようにフィスターさんは理解した。その証として、爪で「名号」を額に。私は「パピエ・コレ^{はりご}（貼絵）」ではないかと思いました。実際に爪そのものは、命があって長生きをするもの。そういう命を託して名号とする。これは別なところの光照院（京都市）で、髪の毛で「南無観世音」を貼りつけて書いたものを調査して修理を請け負ったのですが、これがまた大変なのです。

そういうことを煮詰めていくと、実は仏教美術の根幹にあるものは、先ほど私が申しましたように、日本人そのものはあまりそこに着目しないのです。つまり仏教の本質というのは「お舍利」の信仰である。「仏陀の舍利」の信仰である。「シャリーラ」の信仰である。そういうものは根幹のところ、音と仏像、もっと具体的にいくと、仏教というのは単なるケースの中にあるそういう作品論だけではなくて、これまでご発表があったように仏教の中に

ある全体像、信仰と礼拝対象である作品、仏像、仏画、こういうものは一体であるのではないか。ある意味で、フィスター先生が着目されたことというのは、今までの日本の美術史、特に仏教美術の概念、礼拝対象を研究する概念というものに、痛烈な新たな示唆というか、もっともっと本質的なものを見るべきではないかという教示が、私は痛烈にあるように思うのです。まさに私が常々考えていたことを代弁していただいたような、そういう姿勢があって、非常に敬意を表する次第なのです。

今ちょっと話が出てきましたけれども、結局儀式や作法であるとか、そういう仏教美術という概念の中、範疇の中にはあまり入ってこない、主流ではない部分というのを一体として見るという考え方が成り立つならば、私は「声明」というのは非常に大事な仏教の儀式の根幹にある音だろうと。音と仏教美術、礼拝対象の一体感というのは、先ほどのお香と仏像という関係も含めて、これは相対的に非常に重視されるものではないか。そこに儀式の本質的な意味があるわけです。ということになると、このシンポジウムが目指す一つ大きな柱がここで提示されたような気がするのです。

私は長年金沢文庫におりました。これは神奈川県立の歴史博物館なのですが、4万点ほど資料があるのですけれども。その中に「涅槃会の資料」があります。これはもう皆さんもご存じだと思います。私どもがそこで十数年前にした仕事は、復元ですが、鎌倉時代の楽譜、曲譜を、もう一度、鎌倉時代の音に直してそれを復元する仕事（復曲）をしたのです。その前にあるもの、拜む対象としてあるものが鎌倉時代の「涅槃図」なのです。実は今お話に出ました「曇華院門跡」にも涅槃図がございます。いろいろな儀式が継承されて、今日も行われているわけです。そういうことを考えると、そこで唱えられる声明や読経だとか、こういうものは一体のものとして考えてとらえるべきだと痛感するのです。

参考になるかと思ひまして、十数年前に復元した声明を皆さんにご披露してみたいと思います。映してみてください。[尼門跡と同じ声明の映写15分]これは曇華院門跡にある声明と全く一緒であります。鎌倉時代の『四座講式』という曲譜です。曇華院門跡にも『四座講式』の曲譜がございます、これをいまだに継承しているのです。曇華院門跡だけではなくて、宝鏡寺の隣の「慈愛院」にも大きな涅槃図がある。それから「大聖寺」もそうです。お釈迦さんのお舍利をすごく大事にするという点では、尼門跡は一貫した姿勢を持っているわけです。

今、映像をご覧いただきましたように非常に清楚なものです。とくにこれが鎌倉時代の声明の曲譜の原型でございます。現在の曲想としては非常に派手です。こういうユニゾンではなくて、一つの声を一つのレベルで奏すると

いうことではなくて、かなり明るく曲想を展開しています。内容はお釈迦さんの八ヶ所の遺跡をめぐる、これを讃えることが僧団（サンガ）によってなされるわけです。その場所を一つ一つ巡っていくという回想の場面です。すなわち四座とは涅槃・十六羅漢・遺跡・舎利の四つを釈迦追慕の形式で声明をとることをいいます。旧暦では2月15日に行います。これをつくりましたのは有名な「梶尾の明恵上人」であります。そういうことで、これは男僧のお寺の例にすぎませんけれども、おそらく先ほどの文智尼女王、元瑤さんが活躍した江戸時代にも、各尼門跡で涅槃会、常楽会といいますが、これが催されております。今は涅槃図の大きなものが各お寺にございます。その最も大きなものが曇華院門跡でございます。これを今年修理いたします。

そういうことで、京都の尼門跡というのは名前は知られていますが、中の信仰の内容についてはいろいろな意味で十分に解明できていないのです。今フィスター先生が取り上げたような、男僧のお寺ではちょっと考えられないような、そういう仏像への愛着だとか、礼拝対象の気持ちの込め方だとか、尼僧の細やかな感情というのが手に取るように分かるのです。これからも続けてさまざまな遺品を研究して、フィスター先生、モニタ・ベアテ先生、いろいろな方がかかわって介入されていくことに私どもは援助していきたいと考えています。本日はお招きいただきありがとうございます。

プライバシーのことにに関してですが、これはバーバラ・ルーシュ先生も共通のご意見なのですけれども、尼僧の側では日本人が接するよりも、外国の研究者が接していったほうが非常に寛大なところがございます。これは不思議な現象だと思うのです。私どもが接していても、尼門跡に関する限り2回、3回と行くときちんと対応してくれて、これを研究したいということで断られた例というのはあまりありません。そこところは真剣にこちらのほうで「こういう研究をこういう目的できちんとこうしたい」「成果もこういうことです」と。その絆がかなり築かれてきたということはあります。今まで尼門跡に関しては入れなかった、入るべきではないという日本人独特のタブー視、そういうこちら側の思い込みみたいなものがあって、そういうことに敏感になる。そうではなくて、ルーシュ先生が切り開かれたひとつの姿勢というのは、ジェンダーの問題もバックボーンにありますけれども、それよりも何よりも後水尾天皇という人の偉大さに、今の尼門跡が非常に深い信仰の基盤があることが大前提です。これを世に理解してほしい、知らしめてほしいという姿勢は非常に強くありました。

今フィスター先生がおっしゃったように、それぞれのお寺のあり方で、プライバシーのあり方も多少は違います。しかし世代交代が進んでいまして、

「宝鏡寺門跡」などではもう尼五山としての什宝の公開に踏み切っています。それから、「霊鑑寺門跡」などでも宝物を一般公開に踏み切っています。そういうところがこれからの尼門跡のあり方を引っ張っていく。いずれにしても、こういう研究によってまじめに正当に評価されることが重要です。

今いろいろな団体を通じて修理を、いろいろな観点から、建物、絵画、仏像、工芸品というようなもの、今まで手がけなかったようなものを修理し、援助していく、そして保存する。ニューヨークでは「ワールド・モニュメント・ファンド」という、アジア全体あるいはヨーロッパ全体の文化遺産を保護し保存し復元するファンドとも連携して、実際にこれまで大きな成果を生み出している。「平山郁夫財団」というところは、むしろ積極的に尼門跡の文化財を修理している。すなわち修理と調査研究は尼門跡全体を保存する立場で考えて行かなければなりません。